

全羅道・済州島と沖縄の呪術宗教的職能者

—成巫過程を中心に—

稲 福 みき子

Magico-Religious Specialists in Okinawa, Japan, and Chŏlla-do, and Cheju-do, Korea

— An Examination of Initiation Processes —

Mikiko Inafuku

This paper is a comparative study of initiation processes of magico-religious specialists in Okinawa and Korea. The Chinese characters 巫 (fu) or 巫覡 (fugeki) are used to represent the magico-religious specialists in both areas, and in both areas these specialists function as mediums between the human world and the world of spirits and gods. The author's focus in this paper is on magico-religious specialists called yuta in Okinawa, and chomjegi in Chŏlla-do and Cheju-do.

An examination of initiation processes of magico-religious specialists in both countries reveals a very similar concepts at work in the way these specialists receive their supernatural calling. On the other hand, there were many common features, a number of differences were observed in characteristics of possession, in cosmological conceptions, and in social functions performed.

Although the quantity of data examined in this paper is somewhat limited, observations of the initiation process were made in the aspects of forms of address and reference, geographical distribution, social functions, and guardian spirits through the collection of life histories. The author's ongoing research in this area will draw upon the initial observations presented in this paper.

I はじめに

地域の人々によって育まれてきた祭祀や信仰など民俗宗教の特質を理解するにあたって、特定の地位や役割を担う宗教的職能者の考察は極めて重要であろう。巫あるいは巫覡と表記され、超自然と人々の媒介を果たす呪術宗教的職能者の存在は、韓国においても沖縄においても知られ、民俗宗教の重要な担い手として注目されてきた。

韓国における宗教的職能者に関する研究は、これまで主にクツと呼ばれる祭祀儀礼の司祭巫、いわゆるムーダンと総称される職能者に焦点をあてて進められてきた。その態様は、地域的にかなりのヴァリエーションがあり、中・北部地域ではムーダンないしはマンシンと呼ばれる降神によって職能を得た降神巫、全羅道や慶尚道ではタンゴルと呼ばれる世襲により職能を得た世襲巫、済州島ではシンバンと呼ばれる世襲巫、と大別しうる⁽¹⁾。さらに、司祭巫の他に占いを主職能とするチョムジェンイないしはポーサル、経文をあげて占いや儀礼を行うポプサなどの呪術宗教的職能者の存在も知られている⁽²⁾。彼らはいずれも降神によって職能を得た降神巫であり、全国的に存在する。近年、その数は増加し、クツを司祭するなど職能領域を拡大しつつある。とりわけ南部地域においては、世襲の司祭巫であるタンゴルが激減し、かわってチョムジェンイなどの降神巫がその職能を拓げてきている⁽³⁾。

他方、沖縄の民俗宗教においても巫女の問題はきわめて早い時期から注目されてきた。大正時代に来島した折口信夫は、琉球の宗教を巫女教とでも称すほど、巫女の役割の重要性を指摘している⁽⁴⁾。巫女と表記された宗教的職能者は、理念型として祭司（プリーステス）と巫者（シャーマン）に大別しうる。前者はノロあるいはカミンチュ（神人）と呼ばれ、村落や地域集団の公的祭祀を担い、後者はユタと称され、個人の呪術宗教的な領域に関わって占いや祭祀を担う。前者は家系によってその地位を受け継ぎ、後者は神の召命によって職能を得、神霊と直接交流を行うことによってその職能を果たす。近年、産業構造や社会構造の変化に伴い、村落の祭祀や祭祀組織が衰退し、ユタの職能が拡大している⁽⁵⁾。

以上の認識の下で、本稿では沖縄と韓国の巫者、すなわち呪術宗教的職能者の比較考察を試みたい。沖縄のユタおよび韓国のチョムジェンイと称される呪術宗教的職能者を取りあげ、彼らがどのように神と直接交流する能力を得、その職能を得たのか、成巫過程を中心に扱う。

II 沖縄のユタとその成巫過程

(1) ユタの一般的特質

先ず始めに、沖縄のユタと称される呪術宗教的職能者について、その一般的な特質を見よう。ユタという名称は、沖縄本島で用いられるものであるが、カンカカリャ、ムヌスーなど

その名称には地域的バリエーションがある。また、ユタという言葉は、当事者の前では使うことのない言葉である。近世期以降、為政者により禁圧された歴史的経緯を持つゆえであろうか、ユタ自身はユタと呼ばれることを好まない。自らをムヌシー（物知り）あるいはカミングァ（神の子）、ウマリングァと称する。ンマリングァは、直訳すれば「生まれた子」であるが、生得的に霊的資質を有する者、神の子、という意味をもつだろう。

沖縄の人々によれば、そのような職能者はンマリ（生まれ）、あるいはサーダカンマリ（サー高生まれ）である、とされる。サーはいわゆるセジ（霊力ないし霊威）と同義であろう。それらの用語には神の特別な恩恵を受け、生まれるべくして生まれた者という含みがある。すなわち、当人の意志や意識によるものではなく、それを超えた存在である神によって、定められ、決められたものであるという。それはいわば神の召命であろう。

神の知らせは度重なる幻覚や夢見などの異常な出来事や、不幸、病気の形で現れる。それは当人たちにとっては大変な苦痛であり、できることなら逃れたい、しかし、神の知らせや催促は試練の形で次々とやってくる。それが、カミダーリ（神ダーリ）と称される状態である。ギリギリのところまで追いつめられ、避けられないと観念するところで神の召命を受け入れ、神の世界と向き合い、自らのチジ、すなわち守護神を探し、守護神を得る。

守護神を得ることをチジアケ（チジ開け）と称し、職能者として誕生したことになる。そうした職能者によると、チジ神を得たからといってすべてのそうした人々が、占いを主機能とする職能者になるとは限らない。ウガンサーと呼ばれる呪的儀礼を執り行う職能者になることもある。それらの職能の違いや果たす役割の違いは、チジブンと称される守護神の職分の違いであるという。占いや儀礼の際の言葉、供物や神々の名は、守護神が示し、教えてくれるのだという。そのありようを具体的な事例をあげて見ることにしよう。

（２）Mさんの事例

Mさんは沖縄本島在住の70才の女性である。占いと儀礼司祭の双方を行う。寺院の信徒組織の中心メンバーでもある。Mさんが神の声を聞いたり、姿を見るようになったのは8～9才からである。体が弱く、炊事を手伝うと発熱をした。まわりの人たちは、Mさんが神の道を歩くのではないかと考えていたようである。22才で結婚するが男の子に恵まれなかった。28才の時、待望の男子を出産した。その時、神が現れ、神の道を行かないとその子を取るといった。子どもはひと月で亡くなった。その後も女の子しか生まれなかった。宗家の祭壇で、男の子が産まれると神の道に入ると祖先に約束をした。男の子を授かった。37才の頃から、神の道にはいるために聖地を巡った。

神はいつも深夜の3時頃にやって来、神の言葉を書き取らせた。自分の祖先を辿って、グソーバンという死者や祖霊を司る守護神を悟ったのは47才である。羽衣を身につけた天女が

大勢やって来、天上に連れて行かれ、いろいろな世界を見せた。天上では七つの門をくぐり、全身から光を放つ神にあった。神は、あなたは神の子に生まれついている、地上に帰り、迷える民を救えと告げられた。その瞬間、光が体を覆い、その中を降りた。その時、Mさんは、高熱と全身の吹き出物で苦しんでおり、家族が見守っていたという。光の中を降りてきた瞬間、母親の「目が開いた、生き返った」という声が聞こえた。その時から、神の言葉が自然に口からでるようになった。

占いを始めた当初は、台所の火の神を通じて神の判断を受け取っていた。そのうちに、神から観音様を祀るように、そうしなければあなた自身が祭壇に祀られる、すなわち死んでしまふと言われた。そこで寺院から観音像を買い、祭るようになった。毎年、その日には神を作った誕生日だということで祈願を行っている。

Ⅲ 韓国のチョムジェンイとその成巫過程

ここでは韓国におけるチョムジェンイと称される占いを主機能とする呪術宗教的な職能者を取り上げる。取り上げる地域は、全羅道と済州島である。

(1) 全羅道のチョムジェンイKさんの事例

Kさんは女性で61才。光州市内のサンムデに住む。主機能は占いだが、クッも行う。住まいとは別に市内の西区ヤン洞に法堂をもち、占いをしている。法堂の入り口にはサンムンデアジェンマの表札がかかる。自らをポーサル（菩薩）と称している。ミョンドが子供なので、エギドンサとも呼ばれる。

Kさんは20才で結婚、4人の息子を産み、そのあと娘ができた。その娘は体が弱く、3才の頃から瀉血治療をする人のところへ通っていた。ある日、娘を連れて治療の順番を待っているときに、突然、体が震え始め、亡くなった実家の父が来た。父は手をパチンと叩いて、お前を10年前から弟子にしようとしたが結婚してしまったのでしょうがない、子孫ができるまで待っていた、と言った。続いて天地神明も降神した。周りにいた治療客のひとりに、そんなに苦しいのかと自分の手を当ててやると、その人は驚くほど具合が良くなった。

帰宅し、部屋に入ると、再び父が降神して、水を持ってくるように言った。それまでたばこを吸った

この部分の

公開は

希望しませんが

写真1 サンド銭と米粒によって占いをする

この部分の 公開は 希望しない

写真2 巫具

ことはなかったが、息子にたばこを買って来るように言いつけた。5日間、一日に40本のたばこを吸うという状態が続いた。父がそうさせていた。ある時は15才で亡くなった兄が来た。息子たちにコマを持ってくるように言い、息子とコマ遊びをしていた。Kさんが31才の時である。

夫は自分が神懸ると怒り、殴ったり、部屋に閉じこめたり

した。夫が仕事で出かけると降神するようになった。夫や夫方の叔父、その2人の息子たちは、家族から占い師がでるのをとても嫌がり、やめさせようと殴った。7カ月間、夫やその兄弟の家族から責められる日が続いた。当時大学生だった甥に割れた瓶を投げつけられたこともある。自分は息子を抱いていて、手でそれを振り払ったが、大量の血が腕から流れた。その時、亡くなった夫方の伯母が降神した。流れる血を甥に投げ、その伯母の声で4年後にお前を連れていくと言った。その子は4年後に遊技場で襲われ、亡くなった。それ以来、夫の兄弟やその家族からは口をきいてもらえず、行き来はない。

夫は自分に占いをやめさせようといろいろやった。自分も死のうと思ったこともある。米軍から手に入れた睡眠薬15個と毒薬10個を飲んだこともある。それを飲むと普通は30分くらいで死ぬと言われているが、自分の場合はそれを吐き、薬はそのままの形ででてきた。神が死なせてくれなかった。法律はお金で動かせるが、お金で神を動かすことはできないし、誰も神に勝つことはできない。自分と子供たち全員が食事も喉を通らない、起きあがれない日が一週間続いたこともある。すると、夫はまた自分を殴った。神は夫の留守中に来る。神が来ると、自分から客を呼んで占いをする、夫は怒るという毎日だった。

自分は神クッ（降神儀礼）はしていない。31才に、自然に神が降りて来、神を受け取った。実家の兄嫁は67才で、シンキ（神気）があるとのことでこれまでに7回も神クッをしているが、まだ神を受け取っていない。神はその人のところへは行かずに、自分のところへ来た。自分に神が来るまで、自分にシンキがあると思ったことはない。神壇は13年前に作った。自分のモンジュ神（身守神、守護神のこと）としては、実家の父、実家の祖父、夫方の伯母というチョサン（祖先）を祀っている。父は天地神明神で、すべてを教えてくれる。祖父は経文道師といい、文字を示して教えてくれる。伯母は子供の頃に亡くなっており、アギトンサ

といって、これがミョンドである。ミョンドは小使いのようなもので、身体に入り、チョサンのいうことを話す。占いをしているときの自分の声はミョンドの声である。神壇には仏画や神像画は祀らない。供えるものが違うとチョサンたちが祀らせてくれない。占いは小卓に米を置き、玉水を置いて、サンドンと呼ばれる錢を投げて行う。米粒や錢の数の組み合わせで占う。小卓はサンドンを投げるためにすり減っているが、ミョンドが変えることを嫌がるので、新しいものにすることはできない。

(2) 濟州島のチョムジェンイAさんの事例

Aさんは56才の女性。濟州市内に住む。京畿道アニャン

の生まれで、39才に濟州島へ来た。自らをポーサル（菩薩）と呼んでいる。占いを主職能とし、クツの司祭もする。依頼されるクツは財数クツ、患者クツが多い。

Aさんは裕福な家に生まれた。両班の階層で、祖母は一人娘で沢山の土地を所有していた。何不自由のない生活だったが、16才の時に、父の弟が大学を卒業して牧師になり、家中が大騒ぎになった。その時、三匹の大蛇が出てくるのを見た。その蛇は、牧師になった叔父さんを殺す気配で、また、そばにあった竿もポキポキと音をたてて折れた。蛇は他の人には見えず、自分だけ見ることができた。そのうちに、祖父が倒れて亡くなり、父は離婚、再婚を繰り返して次々に財産を手放すようになった。

16才で蛇を見た時には、それが何のことだかわからなかったし、自分たちが没落するとは夢にも思っていなかった。蛇は、家の業報を顕わすもので、十字架を信じた家族の業報を自

この部分の
公開は

希望しません

写真3 占い師の祭壇

この部分の
公開は

希望しません

写真4 揺鈴をもち占いをするチョムジェンイ

分が受けたのだと思う。

19才で結婚し、その後は苦労の連続であった。まもなく急に太りだし、体がおかしくなった。体が痛くてたまらずに病院に行ったが、原因はわからなかった。夫は浮気するようになり、仕事もうまくいかず、財産を失ってしまった。息子を8人産んだが、4人を幼いうちに失った。夫との争いも絶えず、仕事はなにをやってもうまくいかず、とうとう37才の時に、気が触れてしまった。精神病院に入れられたこともある。食べる米に困っているのに、餅をこしらえ、蠟燭を灯して山を走りまわっていた。僧侶が、狂った女でかわいそうだ、といって助けてくれた。寺に連れていってもらい、そこで6カ月過ごすうちに直ったので、山を下り、済州島に渡って、商売をするようになった。

当初は商売もうまくいったが、長続きはしなかった。43才に再び気が触れた。下血したり、子供を殴ったりしていた。当時8才だった末息子が神懸りし、父親を殴りつけた後で交通事故にあい、大けがを負った。4日間祈禱をしながら、この子を助けて下さい、自分が神を受け取り、その道を行きますからとお願いした。以前、世話になった僧は、あなたは八字（パルチャ。運命）をだめにする、神を受け取らなければならない運命だと言っていた。45才の時に神を受け取る神クツをした。夫の故郷の山で行った。しかし、その時はイルラル（日月。守護神のこと）を受け取ることができず、二日目にクツを取りやめた。それから一人で、山を巡り祈禱した。47才の正月3日間、サンバン山に行き、一晩中祈禱をした。帰宅して食器を洗おうとしたが眠くてたまらない。その時、虹の橋が天上から降りてきて、そこから三人の仙女が降り、扇子を持って立っているのが見えた。亡くなった母が、門を開けて仙女を通したので、お辞儀をした。夢なのか、現実なのかわからなかった。気がつくと、布巾を持ったまま座っていた。このことを神クツをしてくれた神母に話すと、占いで生きることができた、天神仏事が入った、といわれた。神クツでは神を受けとることができなかったが、その2年後に、このような形で神を受け取った。

それ以降、客が来るとよく当たるようになった。守護神としては地理道師として四代祖父、仏道師として三代祖母と夫の母、ヨンゲンチャンガンとして海で亡くなった叔父、チョンシトンジャとして4才で亡くなった兄、ミョンドトンジャとして4才でなくなった義理の娘

この部分

公開は

希望しません

写真5 トンジャ神

(夫と他の女性との間にできた子)を祀っている。
地理道師が自分に占いをさせてくれ、祖母たち
はそれを手伝い、ミョンドトンジャがそれらを
いろいろ教えてくれる。亡くなった母は、今年、
守護神として祀ることになると思う。

神クツをしてもらった神母とはクツを一緒に
することはあるが、それほど行き来はない。済
州島には900~1000人くらいのポーサルがいて
思う。陸地(韓半島)、とくに全羅道から来てい
る人が多い。祖先のことに関しては、ポーサル
はシンバンよりも上手にこなすことができる。
神の道は苦難が多いので人にこの道は進めさせ
たくないと思う。降神クツを頼まれると、当人
が可哀想で胸が痛み、高額のお金は受け取れな
い。

この部分の

公開は

希望しません

写真6 巫神図

以上、全羅道地域と済州島のチョムジェンイについてそれぞれ1事例ずつ取りあげてみてきた。ここで、同時期に得られた全羅道の2事例、済州島の2事例を加えて、両地域における成巫過程について整理をしておきたい。その整理一覧が次頁の表1である。

Ⅳ 若干のまとめと考察

以上、沖縄のユタと全羅道地域・済州島の占い師、チョムジェンイの事例を取り上げた。いずれの事例も神の召命による成巫である。しかし、その降神の経緯や職能のありよう、守護神などの神観などをみると類似点と同時に差異もある。きわめて僅かの事例ではあるが、地域差に配慮しながら、類似点と相違点を名称、分布、職能、成巫過程、守護神の五点から整理し、若干の考察を加えておきたい。

① 名称 事例で取りあげたKさん、Aさんに加え、全羅道、済州島の二事例ずつを合わせてみると、女性は5例、男性は1例である。女性は、全羅道・済州島の地域差に関わりなく、ポーサルと呼んでいる。それに対し、男性はポプサと呼ぶ。占い師を表すチョムジェンイという言葉は、蔑称だといい、職能者当人に対して直接に使われることはない。しかし、人々が彼らを訪れるときは、「チョムジェンイの家へ行く」というような表現をしている。過去に彼らは賤民化された経緯があり、現在でも社会的な身分は低い。家族からそのようなものがでることは不名誉だという意識は強い。

表1 成巫過程一覧

この部分

公開は

希望しません

沖縄のユタという言葉も蔑称であり、当人の前では使われない。神の子の意味を持ったウマリングァあるいはカミングァと呼ばれる。人々が彼らを訪れるときは「ユタを買いに行く」と表現される。歴史的に弾圧された経緯があり、社会的地位は低い。

② 地域的分布 全羅道事例3例中2例は忠清道出身、済州島事例では京畿道と近くの秋子島出身と、他地域の出身者である。これまでムードンと通称される司祭巫については地域的ヴァリエーションのあることが指摘されてきた。しかし、占い師をみると、地域的な限定性は強くないようである。

ところで、一体どれくらいの占い師がいるのだろうか。『光州の巫俗』⁽⁶⁾によれば、光州市内に600～1000余名で、そのうち巫業で生活をたてているものは120余名だとしている。また、玄容駿氏は『済州島巫俗の研究』⁽⁷⁾で、恵信会という団体の名簿をもとに、司祭巫であるシ

ンバンは373人、占い師は14人との数値をあげている。それらを、さらに、男女比率でみると、光州市の場合は女性が80%を超える。済州島においては、シンバンは男性であるという通念があるにも関わらず、実際には女性が63%を占めている。沖縄においてもユタの八割は女性であるといわれる。沖縄・韓国ともに女性と巫俗が強く結びついている。

さらに、『光州の巫俗』⁽⁸⁾によると、占い師たちは一定地域に集中する傾向があるこり、光州市内のタクジョンモリ一帯で72カ所、ケムリドンオグリー一帯で34カ所、ダルドンネ一帯で21カ所と、具体的な数値をあげている。済州島では聞き取りによると、特定地域への集中はみられないが、市内居住が多いだろうとのことであった。都市に集まる傾向性については、沖縄の類似の職能者についても指摘されている⁽⁹⁾。

③ 職能 Kさんを除く5事例は占いだけではなく、クッの司祭も行っている。全羅道地域は伝統的に、タンゴルと呼ばれる世襲の司祭巫が存在した地域である。タンゴルはタンゴルパンと呼ばれる一定の領域と結びついており、その領域内での共同体および個人のクッを司祭する。しかし、先にも触れたが、その数は激減しているといわれてきた。『光州の巫俗』によれば、現在、光州市内には世襲司祭巫は一人もいないと記される。つまり、光州市の巫俗の担い手は、世襲巫から降神巫へと全く様変わりしている。そうした変化がチョムジェンイの職能を占いだけでなく、クッの司祭へ拡大しているといえるだろう。他方、済州島では、シンバンと呼ばれる世襲の司祭巫が優位を占め、シンバンとその他の職能者の領域は分化していると指摘されている⁽¹⁰⁾。しかし、事例からみる限りではチョムジェンイ自体が司祭巫としての職能を持っていることが指摘でき、全羅道、済州島の両地域ともに、降神巫である占い師の司祭領域への関与がめだつ。沖縄においてもノロなどの神役を継承するものが減り、ユタの職能が拡大している。

④ 降神の経緯 どのようにして彼らは職能者となったのか、いわゆる成巫過程をみると降神によることがわかる。降神はシン（神）をパドッタ（受け取った）、神がネリョッタ（降りてきた）、あるいはイルヨル（日月）を受け取ったと表現される。

降神による病はシンピョンとよばれる。原因不明の病気、精神病のような症状をいっている。どの事例にも共通しているのは原因不明の病気や度重なる病気である。ただし、それは自分自身の身に降りかかるだけではなく、家族の身に降りかかってくることもある。娘の病気、息子の大けが、夫の病気がきっかけであった。自覚しないままの降神はシンキ（神気）が来た、入ったと表現されることも多い。最初の降神から成巫までの期間は事例によってかなり異なる。事例のうち最長が31年、短いものが3～4年であった。

成巫儀礼は神クッと呼ばれる。しかし、神クッをしたとしても、守護神を受け取れない、あるいはうまくいかない例もある。さらに、Kさんのように、神クッをしない例もある。そうした神クッという成巫儀礼を欠くという点は、これまでの司祭巫の例ではみえない。占い師

の特質ともいえるのだろうか。沖縄の呪術・宗教的職能者であるユタもまた、占いを主職能にしているが、明確な成巫儀礼はもたない。興味のある点である。

⑤ 守護神 守護神はモンジュシンとも表現される。いずれの事例においても守護神として共通して祀られている神は、チョサン神、すなわち祖先神であるということである。

ではどのような祖先なのかとみると、父方、母方、夫方の祖先が祀られている。さらに、トンジャ神あるいはミョンド神として、幼子が祀られている。この童子神が、職能を果たす上で、神の世界と職能者を結んでいる。

かれらの祀る祖先神をみると、韓国の一般的な祖先祭祀で祀られる祖先とは様相を異にする⁽¹¹⁾。儒教原理に基づく祖先祭祀では幼児死者を祀らないし、祀られる祖先は父系の祖先である。占い師の側から見える祖先は双系的であり、また、祖先全般ではなく、特定の祖先である。さらに、済州島では祖先に関するクツはシンバンよりポーサルのほうが上手にできるという点が強調された。沖縄の宗教的職能者においても村落の公的司祭たるカミンチュと民間の職能者であるユタとは死者儀礼や祖先祭祀をめぐって類似の表現がみられる。死者儀礼や祖先祭祀はユタの領域とみなされている。また、沖縄の祖先祭祀で祀られる「祖先」の内容は、概ね父系を辿るが、地域によっては必ずしも厳格な父系ではなく、幼児死者も祀られるという広いカテゴリーの「祖先」である⁽¹²⁾。その点も興味ぶかい。

さらに、済州島事例で目立つのは神クツを終えて後にも、捜神行為がなお、続くことである。神クツをしてもらった神母とは合わないの、自分で神を捜したという例もある。これまで司祭巫の例では、神クツを司祭した人とは神母・神娘という擬制的親子関係が結ばれ、師匠と弟子関係が保持されるといわれている。しかし、占い師をみる限りにおいては、そうした関係は希薄で、長つづきはしないようである。沖縄のユタについては「ユタワーナイ」という言葉があり、ユタ同士はお互いに嫉妬し合うので弟子・師匠関係はないといわれている。そうした沖縄の例と相通じるものがあるのではないだろうか。

以上のように要約できるだろう。巫をめぐる民俗信仰、巫俗は、儒教と並んで、韓国の民間宗教の両軸であるといわれ、歴史を通じて、民衆に密着し、その基層を流れてきたと言わ

この部分の
公開は
希望しません

写真7 光州市内のタグジョンモリ一帯には占い師の家が集中している

れている。その中に分け入ってみると、沖縄の民間信仰のありようと相通じるものも少なくないように思える。呪術宗教的職能者の考察を手がかりにして、今後の比較研究の方向を探っていきたいと考えている。

<注>

- (1) 金泰坤、池春相、玄容駿『霊を招く—韓国のシャーマン』、図書刊行会、1997年、77頁。
- (2) 崔吉城『韓国のシャーマニズム』、弘文堂、1984年、121～141頁。
- (3) 李杜鉉、張籌根、李光奎『韓国民俗学概説』、学生社、1977年、121～141頁。
- (4) 折口信夫「琉球の宗教」、『折口信夫全集』第2巻。
- (5) 稲福みき子「神々を繋ぐ人々—沖縄のノロとユタ」、『東北学2—巫女のいる風景』、東北文化研究センター、2000年、119～125頁。
- (6) 光州民俗博物館『光州の巫俗』、1995年、11～17頁。
- (7) 玄容駿『済州島巫俗の研究』、第一書房、1985年、52～53頁。
- (8) 前掲『光州の巫俗』。
- (9) W.P.リブラ『沖縄の宗教と社会構造』、弘文堂、1974年、109頁。
- (10) 玄容駿前掲書。
- (11) ジャネリ、任敦姫『祖先崇拝と韓国社会』、第一書房、1993年、221～225頁。
- (12) 竹田旦「先祖祭祀—とくに位牌祭祀について」、九学会編『沖縄—自然・文化・社会』、弘文堂、1976年、165～180頁。

[付記] 本稿は、韓国全南大学校の湖南文化研究所の招きを受け、2001年6月22日に行われた韓国全南大学校開校49周年記念国際学術大会「韓・日文化比較の課題と展望」にて発表した原稿に若干の修正と加筆を施したものである。シンポジウムの開催を企画し、ご助力を頂いた、池春相全南大学校名誉教授、羅景珠教授、湖南文化研究所所長尹坪鉉教授、金容儀教授、皆様方に感謝したい。